

妙安寺だより

テレフォン法話 092(751)6084

日本の生活の知恵 七夕

「七夕」の行事は、わが国ではごく少ない星の祭りです。これは、七月という時期はちょうど田の草取りの最中で、重労働が続くころです。しかも、蒸し暑くて体力の消耗の激しい時なので、休養日として七夕を考え出したわけで、これも生活の知恵の一つといえるでしょう。

中国の神話によると、牽牛星と織女星という星がいて、真ん中には天の川という星雲が流れ、この二つの星は、元来仲の良い夫婦星であったが、あんまり仲がよすぎて、男は耕作をなまけ、女は機織をなまけるようになりました。

やがて、天帝の怒りに触れ、二人は天の川を隔てて両側に離されてしまいました。そして、一年のうちの七月七日の晩だけ会うことを認められ、あとは一所懸命に働かなければならないという処罰をうけたということです。

また、この日は「乞巧奠（きこうでん）」といって、技術が上達することを祈る祭りの日でもありました。特に男の星が牛を牽（ひ）いているので農業、女の星が機織をしているので手仕事が上手になるという信仰が生まれました。

【短冊（たんざく）】

江戸時代になると、織姫に見てもらおうと裁縫の技術が上がるということから、一年間に織った布の切れ端を、正方形や長方形に切り、笹の葉につけて軒先に出すようになりました。元禄時代の頃には、布ではもったいないと紙を使い始めるようになりました。短冊や色紙形に切った紙を出して、裁縫の技術が上がるのだったら字も上手になるだろうと考えて、その紙に色々なものを書いて飾るようになりました。

【お中元とそうめん】

七夕を農業節句として考えると、田の草取りなどの労働にそなえ、健康に気をつける意味で、七夕の晩にはそうめんを食べました。そうめんは糸の感じから、織姫様にもそうめんをあげることから、昔から夏の贈り物は、江戸でも上方でもそうめんと決まっていました。

そうめんが江戸時代に急に全国に広がったのは、七夕信仰と結びついたからだといわれています。

また、この時期には女性もけっこう労働するので、母体保護という意味から鬼灯（ほおずき）の根を煎じて飲みました。

鬼灯（ほおずき）の根は緩下作用があるので、便秘、秘結を治しますが、あまり飲みすぎると墮胎するおそれがあるということから、母胎保護の節句だという意識もありました。

お知らせ

住職が、副住職の帰山式（2月21日）のときに挨拶しましたように、首の「後縦靭帯骨化症（こうじゅうじんたいこっかしょう）」が再発し、7月に入院し手術を受けることになりました。

復帰（ギブスが取れるまで）するまでは、前回の様子からすると約2カ月位かかるのではないかと思います。

従いまして、8月のお盆回向まわりについては、副住職が極力お伺いする予定ですが、限られた日数と時間によって、お伺いできない場合がありますので御了承下さい。

住職も、7月末かお盆前には退院することができると思います。

お盆の回向まわりにはお伺いできませんが、お寺にてお盆の回向を営むことができると思います。

（詳細については、後日御連絡いたします）

檀信徒勉強会の案内

7月26日（土）午後1時より 「立正安国論を読む」

持参品 お経本 数珠 筆記用具 「立正安国論」の本

